

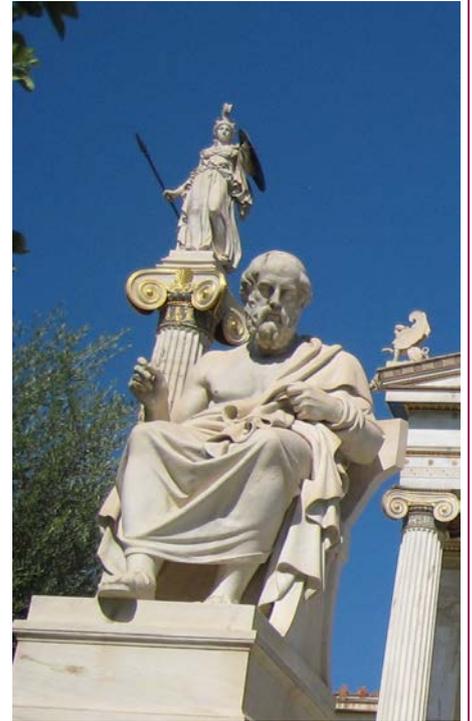


## プラトンと私

金山 弥平 (哲学)

私は古代ギリシア哲学、とくにプラトンを研究しています。皆さんのなかには、なぜ「哲学」ではなくて、「プラトン研究」なのですか？と疑問をもつ人もいるかもしれません。しかし哲学をする者はだれでも、だれかが書いたものを読んで批判検討するところから始めなければなりません。私は古代ギリシアのテキストから出発しているのです。

しかしなお、哲学が「国家と個人」、「科学のあり方」など、現代人と密接に関わる問題を扱うのに対して、プラトン研究は古い考え方の受容・陳述にすぎないように思えるかもしれません。しかし古典は、単なる過去の遺物ではありません。むしろ、あらゆる時代が永遠の価値を認めたが故に今日まで伝えられてきた生きた思想なのです。現代人が問題とする問いのほとんどすべてが、プラトンによって扱われています。現代の哲学書も、そこから育った枝にすぎません。100年後にはその枝のほとんどが読まれなくなっているかもしれませんが、プラトンの幹は、人間の歴史が続くかぎり私たちに命を与え続けてくれます。



プラトンとアテナ

現代人にとって異文化である古代世界を理解するためには、限られた自分の世界から飛び出し、古代人とともに思考すること、とくにプラトンのような天才が示す広大な宇宙では、現代の諸学問の道具立てをも駆使してテキストの一字一句を精査していくことが必要となります。それが自分の哲学をすることにもつながります。ニュートンは晩年、その生涯を振り返り、自分は、発見されないまま横たわる真理の大海を前にして、海岸で、きれいな小石や貝殻を見つけて楽しむ少年でしかなかった、と述べています。私も同様の子どもにすぎませんが、きれいな貝殻を見つけたときには、100年後の人もこの美しさを共有してくれるのではないかと思います、プラトンとともに哲学することの喜びに満たされるのです。

研究室紹介—File11

## 何をどこで学ぶのか

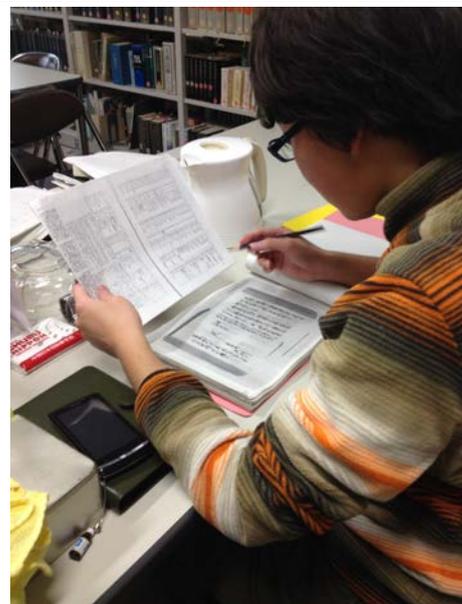
研究室名：日本史学研究室

大学で日本史学を学ぶと聞いて、どのような想像をしますか？なかなか想像することは難しいですし、私自身、高校生の時はよく分かっていませんでした。そこで、大学で日本史学を専攻するとどのような勉強をするのか、また、日本史学研究室とはどんなところなのか、簡単に紹介していきたいと思います。

まず、私たちがどのような勉強をしているのか。今まで積み重ねられてきた研究成果を踏まえ、昔に作成された文献史料（例えば法令や日記）を読み解いていく。これが、私たちが学んでいる日本史学です。高校では、既にできあがったかのように見える教科書を中心に歴史を学ばれていると思いますが、大学の日本史学とは大きく異なります。史料を読み解いていくなんで難しそう、と思われるかもしれませんが、しかし、歴史が好きであれば、大学で専攻する日本史学も、とてもおもしろく感じられると思います。

実際の授業では、論文の読み方や、史料解読に必要な知識、史料の読み方・考え方を、先生がしっかりと教授して下さいます。先輩も、分からないことがあれば親切に答えて下さり、また一緒に悩んで下さいます。時には、同輩で集まって勉強会を開くこともあります。自分の学年が上がると、後輩に頼られることも少なくありません。最初はなかなか難しい学問も、先生や先輩、同輩、後輩に囲まれながら、少しずつ自分のものにしていける環境が、日本史学研究室にはあると思います。日本史学を追究するだけでなく、多くの人と関わりながら研究室生活を送ることができる、それが日本史学研究室の魅力です。

[舩 真央 (博士前期2年)]



卒論に取り組む4年生。お茶を飲みつつ頑張っている模様。

## 研究室紹介—File12

### ドイツ文学研究室より

研究室名：ドイツ文学研究室

みなさんは「ドイツ文学」と聞いてどんなものを想像されますか？グリム童話やゲーテ、カフカやヘッセの作品が頭に浮かぶかもしれません。ドイツ文学研究室には、そういったドイツ文学を学ぶ購読の授業や、学生各々が自分の関心のあるテーマについて調べて発表するゼミ形式の授業などがあります。学生はドイツの文学史や歴史、思想史に照らし合わせ、ドイツ文学を総合的に研究します。また、ドイツ語を学ぶ語学の授業も開講されており、ドイツ文学を原文で読む力や、ドイツ語のコミュニケーション能力が養われます。ドイツ語の語学力を高め、ドイツ文学に関する知見を広げるため、名古屋大学の協定校であるドイツのフライブルク大学に留学をする学生もいます。



ドイツ文学研究室は、現在、大学院生3名、学部生6名の計9名で構成される小さな研究室です。そのためもあってか、研究室は和気藹々とした雰囲気です。学生と一緒に出掛けたり、ドイツの文学作品について議論する読書会やドイツ映画と一緒に観賞する上映会を学生が主体となって定期的に行っています。性格はそれぞれバラバラですが、ドイツ文学研究室内の学生には、「文学が好きだ」という思いが共通しています。そんな思いが私たちに共に学ぶ姿勢を培ったように思います。

文学とは、自分を取り巻く世界と人間そのものについて学ぶ学問だと考えます。ドイツ文学研究室で私たちと一緒に学びましょう。

[樋口 恵 (博士後期3年)]

## 最近の文学部

### 名大祭

この号がお手元に届く頃には、ちょうど本学では、「名大祭」が開催されているかと思います。大学祭といえば、お笑い芸人やバンドのライブ、模擬店などをイメージされると思いますが、学術的な研究公開企画もちゃんとおこなっています。文学部からもいくつか参加しているので、お立ち寄りの際はぜひ覗いてみてくださいね。

(K記)